

久しぶりに日本に長くいるため、季節の移り変わりを
感じる今日この頃。楽しいけれども、いちいち洋服を考
えなければいけないのが面倒くさい。一年中Tシャツで
いられるルワンダは楽だなあ。

それから！報告会の季節となりました。今年も何ヶ所
かで行いますので、皆さん！ぜひいらしてください。お
待ちしていま～す！

【ルワンダとワンラブの関係】

1997年からルワンダで活動を始めてから8年。こ
こで改めてルワンダとワンラブのことを伝えたいと思
います。



ルワンダはアフリカのほ
ぼ中央にある小さな国。内陸
国で820万人程の人が生活
をしています。一年は雨季と
乾季に分かれ、暑くもなく寒
くもなく、過ごしやすい気候
の国です。

昔々、ルワンダの人は同じ
文化と言葉の下、平和に暮ら
していました。しかし19世紀の終わり、ヨーロッパの
人々がルワンダを支配するために入ってきた時から、ル
ワンダの歴史は変わっていきました。

最初にドイツの人たちが入ってきた時は、さほど問題
はなかったと言われています。しかしその後ベルギーが
入ってきた時からルワンダの悲しみは始まります。ベル
ギーの人たちは学校を建て、教育を与えることを始めま
したが、その反面ルワンダの国民を部族と言うものに分
け、その待遇を変えたということです。部族と言うもの
が、学校の授業でも教えられ、それぞれの部族名は身分
証明書にも書かれ、国民は嫌がおうにも自分の部族を確
認させられました。しかしながらその部族は根拠のある
ものではなく、その人の仕事によって分けられたり、あ
るいは身体的な特徴（鼻筋が長い、歯が長い、目が大き
いなど）によって分けられました。そして待遇を違える
ことにより、お互いの憎しみを煽るように教え込まれま
す。

1959年、最初の虐殺が起こりました。この時たく
さんのルワンダ人が国外に逃げていったと言うことです。
94年の大虐殺までに何度か同じような殺し合いが繰り
返されました。ルワンダを支配するためにヨーロッパの
人たちが入り込み、彼らによって作られた根拠の乏しい
身分証明書が原因で人々は分けられ、その部族名ゆえに
人々は罪も無いのに殺し合ってしまったのです。身分証
明書さえ作られなければ、人々は殺し合うことも無かつ
たでしょう。

94年の大虐殺後、ルワンダは新しい政府ができ、国
民は国の復興に努力を続けています。まず一番初めにし
たことは、部族を廃止すると言うこと。そして新しい世
代に教育を受ける機会を増やし、法に基づいて国を立て
直すと言うことです。現在のルワンダ政府は、ツチ族も
フツ族も混じり、国について一緒に考えています。学校
でもみんな同じように机に向かっています。あの忌まわ
しい部族名を書かれた身分証明書も、今は存在しません。

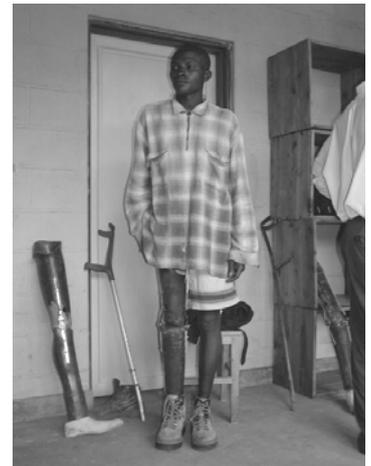
しかしながらまだ部族にこだわっている人たちがい
ると言うことも事実です。長い間自分たちを苦しめてき
た問題が、すぐに解決するわけではありません。心の奥
底は、とても傷ついています。ルワンダが真の平和を取
り戻すためにはまだ時間が必要でしょう。でもルワンダ
の新しい世代の人たちが、正しい教育を受け、公正な法
の下に暮らしていくことができれば、必ず良い国になる
と信じています。

そしてこのようなルワンダの歴史があったから、ワン
ラブはスタートしたと思います。

きっかけは89年にルワンダ人と日本人が出会った
ことが始まりでしたけれども、その後ルワンダの歴史・
内戦について、そして出会ったルワンダ人が障害を持っ
ていたということから、お互い障害者支援について考え、
現在のワンラブにたどり着いたと思います。

94年の虐殺のために、内戦や地雷で障害を持つ人が
急激に増えてしまいました。それ以外にもポリオで手足
が不自由な人、事故・医療ミスなどで障害を持つ人がた
くさんいます。

彼らに義肢装具・杖
などを作って配ること。
これが活動の中心です。
ルワンダで障害を持っ
ている人達は、仕事に
就いているケースは少
ないです。だから基本
的には無償でこれら
を提供しています。



そしてルワンダの
人たちに義足を作る技
術を伝えること。義肢
装具士を育て、一本でも多くの義足を作っていくために。

忘れてはならないのが、障害を持つ人たちが精神的に
も立ち上がっていくということ。そのためにスポーツに
も力を入れています。水泳・サッカー・重量挙げ・陸上
のチームを作り、練習をしています。2000年には初
めてシドニーパラリンピックに選手を送り、2004年
のアテネパラリンピックでは、陸上でルワンダ初の銅メ
ダルを取る事ができました。

ルワンダは大虐殺からの復興を目指し、みんな力を合
わせて歩んでいます。そしてワンラブもその歩みの中に

入り、未来を見つめています。ルワンダだから始まったワンラブの活動。これからも行方を一緒に見守っててください。よろしくお願いします。

【愛・地球博を終えて…】

半年間に及ぶ「愛・地球博」が9月25日に閉幕しました。思えば3月、雪の降る中迎えた初日がついこの間のようにです。

開幕当初は人の入りも危ぶまれた万博でしたが、徐々にその数も増え、閉幕間近には毎日20万人以上の来場者でした。

ワンラブは瀬戸会場の市民パビリオンに小さなブースを借り、半年間活動の紹介をしてきました。ルワンダでの活動を写したパネル、実際にルワンダで作った義足や装具の展示、そして訪れる人たちにパンフレットを配



りました。若い学生、子供づれの家族、年配のご夫婦、その顔ぶれはさまざまです。中にはルワンダの状況を思い浮かべ、涙を流す人もいました。

また展示してある義足をこわごわ覗き込み、その重さを確かめる子供。1人の小学生の女の子は、夏休みの自由研究のために、この活動のことを調べてくれました。

5月と7月には、地球の授業と題して、一週間スライドを見せながら活動の話をしました。

それから、基本的には会場で寄付を募ることができなかつたため、資金を集めるための別の案として許してもらったのがTシャツ販売。世界でも貴重なルワンダのマウンテンゴリラを、ルワンダのアーティストがTシャツに描きました。季節的にも暑くなる頃だったので、売れ行きは好調。全て売り切ることができました！嬉しかったのは多くの人がTシャツ販売の目的を理解して、買ってくださったことです。それはつまり、買っていただくことにより、活動の支援につながるということ。ルワンダで作ったTシャツはあまり質も良くなく、もしかしたらもう既にクタクタになってしまっているかもしれません。ごめんなさい。それでも買ってくださった皆様のお気持ちに感謝します。

万博では要人たちもブースを訪れてくれました。5月には高円宮妃。なんとTシャツも買っていただきました！6月には万博のルワンダデー参加のために日本を訪れた商業・産業・投資促進・観光・協同組合大臣（長い…）と在日ルワンダ大使が訪れ、みんなで記念撮影。それから国際万国博覧会協会の人たち、エリトリアの外務大臣、南アフリカのネルソン・マンデラのお孫さんも訪れ、活動を励ましてくれました。

会期中には、時々メイン会場でもある長久手会場へも足を運びました。こちらはどこにいても人・人・人。



人気のパビリオンは8時間待ち(!)と言う時もあったそう。歩いている人も心なしか殺気立っている感じ。ルワンダのブースもあるアフリカ館は、それぞれの文化を紹介していたけれど、最後の頃にはアフリカンマーケット状態。つまり民芸品などの販売。そしてそれに集まる人たちでごちゃご

ちゃ。アフリカの民芸品を売るのも良いけれど、私としてはもう少し国のことをきちんと紹介してほしいなあ。アフリカ館にあるレストランは、万博でも一番の人気だったとか。私もここで何回か食べました。しかし注文をするにも列に並ばなくてはならない！腹ペコ状態で並んでいたら、きっと暴動が起こったことであろう。

でもここから市民パビリオンのある瀬戸会場へ戻るとホッとします。人が比較的少ないこと、緑が多いこと。そして何よりも落ち着いたのは、人と人のつながりがきちんとあったと言うことでした。お客さんたちも心なしかリラックスしていたようです。

市民パビリオンでは、いろいろな市民活動が紹介されていました。特に印象深かったのは、自らも手に障害を持っているおじいさんが、同じように障害を持つ人たちのために



自助具を作っていると言う活動。とても参考になりました。またその方の生き方には学ぶこともとても多かった。

いくつかあったブースの中には、半年間スタッフが誰も来なかったようなところもあったけれど、あれはもったいない。せっかく活動の宣伝をする良いチャンスだったのに…。

今回は本当にたくさんの人にお世話になりました。ワンラブの助っ人の皆さんは、仕事の合間をぬってブースに立ってくれました。本当に助っ人なしでは半年間やり遂げることは無理であったに違いない！パンフレットが残り少なくなれば、印刷に走り、必要なものがあれば、東に西に飛び回り…。またそのご家族には、泊めてもらったり、おにぎりを作ってもらったり、本当にありがたい限りでした。そして万博のスタッフの皆さん、ブースに誰も立っていないときは、私たちに代わってお客様と話をしてくれました。閉幕頃には、すっかり友達のようになってしまう、思ったことを何でも話せたのが嬉しかった。最終日には、別れを惜しみ、涙を流しましたね。そして足の悪いガテラのことを気遣って、そっと椅子を用意してくれたりくれたり…。展示しているブース同士のつながりができたことも嬉しかった。数ヶ月一緒に展示をしていると、ご近所づきあいのようなものが始まり、

お互い情報を交換し合ったりしましたね…。せっかく知り合ったのに、万博が終わってしまうのは辛い！しかしこれからが本当の始まりである。このつながりを大切に、未来を見つめよう！

思い出深い半年間、終わってしまって、なんだか気が抜けてしまいました。万博が終わった翌日、会場近くの駅に行ったら、もう既に取り壊しの工事が始まっていた。寂しいなあ。でもすばらしい半年を私たちに分けてくれた愛・地球博、どうもありがとう。そして一緒に過ごしてくれた皆さん、どうもありがとう。



いろいろと賛否が分かれていた万博だけど、少なくとも参加した人たちにとっては、たくさんの思い出を残してくれました。次に日本で万博が開かれるのはいつだろう？その時まで、ワンラブはがんばっているだろうか？もしがんばっていたら（そのつもりだけど）、その時も絶対参加するぞ！

【二人目の研修員】

8月半ば、ルワンダから義肢装具の製作技術を学ぶために、研修員がやってきました。去年から今年にかけて研修を終えたセザールに引き続き二人目です。名前はエマーブル。97年からワンラブで義肢装具士見習いとして働き始め、現在では主要なスタッフ。幼い頃にポリオにかかり、足が不自由で、本人も装具を履いています。



彼がルワンダ国外に出るのは初めて。飛行機でルワンダからケニアに来た時、既に「ヨーロッパのようだ」と言う感想。それよりも人が多く、雑然とした国、日本は彼にとってきっと何もかもが新しいのではないのでしょうか。彼も1ヶ月の日本語研修を終え、10月から横浜の義肢製作所で勉強を始めています。

日本語については、予想以上に上達が早いとのこと。ただ問題は日本の食事に慣れないということのようです。世界中の食べ物が、当たり前のように食べられる日本。でももしかしたら、これは不思議なことなのかも知れない。もちろんルワンダにもフランス料理やイタリア料理、中華料理もあります。でもルワンダ人の中には、外食を好まず、家庭料理で毎日を過ごす人もたくさんいます。ジャガイモ・サツマイモ・豆・バナナ・野菜など、そんな素朴な食材を口にしている彼らは、とても食べ物に対して保守的です。エマーブルも、ルワンダからたくさんの食材（主食となるウガリと言う食べ物、豆など）をかばんにいっぱい詰め込んでやってきました。曰く、荷物のほとんどは食材だったとか…。宿舎では自炊が基本なので、日々これらの食材を使いながら料理しているとか…。果たして無くなったら、日本の食材にトライするの

だろうか？

さて二人目の研修員。目的は日本の義肢製作技術を学んでもらい、それをルワンダの人たちに伝えるということ。現在、前年度研修を終えたセザールがルワンダで健闘中。ガテラも私もしばらく日本を留守にしている。彼の負担も少なくないはず。しかし一生懸命ワンラブを動かしているようです。そして「責任」を与えられて嬉しそうでもあるようです。

彼らのように義肢製作技術を学んだ青年たちに望んでいることは、「独立」することです。今はワンラブが彼らの生活を支えているけれど、いつか自分の技術を生かしながら工房を切り盛りしていくこと、そうすることにより彼らにもっと責任感が生まれてくることでしょう。そうなった時に、ワンラブは義足材料の支援などをしていきたい。彼らをワンラブで完全に困ってしまうのではなく、後ろから見守っていく、そんな形を取っていきたいと思います。

さてこれから半年間、エマーブルはどんなことを学んでいくでしょう。とても楽しみ。

これからもこういう機会がドンドンあればいいなあ。

研修員を受け入れてくださった神奈川県庁の人たち、国際研修センターの人たち、そして研修をしてくださる平井義肢の皆さま、どうもありがとうございます。

【毎日国際交流賞受賞！】

去る9月22日、大阪の毎日新聞本社で「毎日国際交流賞」の授賞式がありました。この賞は、毎年国際交流・協力を行っている団体と個人に贈られるものです。今回個人の部で、この賞を受けることができました。個人の名前で賞を受けたけれども、これは皆さまの力なくしてはいただくことができなかつたと思います。今までワンラブを支援してくださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。

毎日新聞の記者さんはルワンダまで行って、活動取材してくれました。7月、ルワンダに一時戻っていたガテラが記者さんを迎え、義肢製作所・巡回診療・障害者スポーツの様子、そして虐殺の起こった教会などを取材しました。その記事は8月31日の毎日新聞に掲載されました。

授賞式には団体として受賞された緑の地球ネットワークの方と共に、ガテラと私は壇上に上がり賞状と賞金の目録を受け取りました。また式には在日ルワンダ大使も激励の言葉を伝えるために出席してくださいました。きっとこの受賞のことは、ルワンダの人たちにも伝えられることでしょう。今まで皆さんにワンラブの支援をお願いし、その支援のおかげで活動を続けていくことができ、その結果このようなどともありがたい賞を受賞することができました。

この受賞をきっかけに、ますますワンラブが前進していきますように。

【ガテラ in RWANDA】

ワンラブは97年から、キガリ市に義肢製作所を設け、義足を作り始めました。がむしゃらに作ってきたけれども、ふと気がついたことが。それは地方に住む障害者たちは、キガリまで出てくるのが難しく、義足を手に入れることができないということ。それを改善するために、2002年に巡回診療が始まりました。自分たちの車で義肢装具士と共に彼らの住んでいる所を訪れ、義肢製作を開始しようという試み。しばらくこの形を続けていたのですが、予想以上に経費がかかってしまうということが判明。再度検討。そして出た結果が、それぞれの県に常駐のスタッフを置き、製作を行っていくということでした。ちょうどこの時期は、ルワンダ政府も地方分権化を進めていた時でもあります。この計画は順調に進んでいたのですが、次第に問題も出てきました。これらの活動はワンラブのスタッフのみで行っていましたが、政府の協力がないと継続をすることが難しいということ。そしてスタッフの中にはきちんと仕事をしない人たちも出てきてしまったということ。つまり私たちの目の届かないところにいるので、サボったり遅刻をしたりするスタッフが目立つようになりました。彼らの出欠状況をコントロールの出来なくても、ワンラブは彼らに給料を払わなくてはなりません。

さて、解決策は？

ガテラはまず日本で障害者がどのように福祉を受けているか調査をしました。日本の障害者手帳を持っているがテラは、早速自分の装具を作ってもらおうと動き出します。



私たちの住んでいる茅ヶ崎では、月に一度補装具を作るための巡回診療があります。障害者・福祉課・義肢製作所の人たちが一度に集まり、障害者は福祉課に自分たちの問題や必要としているものを訴えます。福祉課は義肢製作所に義肢装具などの注文をし、それに基づいて義肢製作所は義足を作ります。義足代は主に福祉課が負担してくれます。

この方法はとても良い方法でした。ルワンダでは障害者と福祉課と義肢製作所が一度に集まって、問題を解決する場所がありませんでした。義肢製作と障害者の問題を受け付けると言うことを、ワンラブ自身で行っていたため負担もとても多かったです。でもこれらの作業を福祉課と一緒に行えば、仕事も分担され、作業は円滑に進んでいくことは間違いありません。

これらの方法をルワンダの政府に伝えるため、ガテラは7月にルワンダに戻り、地方に派遣していたスタッフを呼び戻し、同28日県の福祉課の人たちを呼び、セミナーを開催しました。

まず今後も地方に住む障害者に義足を作るためには、行政の力が必要であるということ。そのために①月に一度各県の巡回診療の日を決め、障害者・福祉課・義肢製作所が会う機会を作ること。②義肢装具などを作る材料費を、政府の年間の予算として組むこと。を提案しました。

一つのNGOができることには、限界があります。でも行政と力を合わせることによって、もっとたくさんの支援をルワンダの障害者に対してできるはず。行政も障害者の抱えている問題を直接聞くことによって、適切な支援ができることでしょう。

来年度から、このプログラムをスタートするために動いています。再び巡回診療と言う形に戻るけれども、その時は福祉課の人たちと一緒にです。巡回診療の日程が決まり、実行することができたら、ワンラブは目標に一歩近づき、より多くの障害者支援を進めることができるでしょう。

【ごめんなさい】

報告会のお知らせを早くしなくてはいけなく、また事務仕事をする人員が少ないため、今回もマンガと支援して下さった人たちの名前を載せることができませんでした。ごめんなさい。

また通信発送の祭は、十分な注意をしているつもりですが、お名前・ご住所の間違い、ダブって送付されるなどの手違いがございましたら、ご連絡ください。

【と言うわけで…】

日本の事務所で、事務仕事を手伝ってくださる人はいませんか？ひととおりパソコンができる人、簡単な会計ができる人、そして柔軟な考えを持ち、ワンラブを支えてくださる人を探しています。月に2~3回程度通える人、ぜひお声をかけてください。よろしく願います。

また援助物資などを保管しておくための場所を探しています。どなたか「一部屋空いているぞ!」とか、遊んでいる場所をお持ちの方、ご連絡ください!

【おことわり】

当団体はご提供いただいた個人情報について、皆様からご同意をいただいた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

ワンラブ通信 第31号

2005年10月

発行：ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南 6-6-69

Tel: 0467-86-2072

Fax: 0467-86-2092

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所)

onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

<http://www.onelove-project.info/>

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト